特集 はこまち対談

Part 8

アートとまちづくり

大下 智一（おおした ともかず）氏

〈PROFILE〉

1967年函館生まれ。北海道大学文学部哲学学科卒業。1991年から北海道立函館美術館学芸員となり、1999年北海道立近代美術館学芸員を経て、2004年に再び現職の北海道立函館美術館学芸員。現在は北海道教育大学函館校集中講義講師を兼務。これまで「山下りんとその時代展」を手掛け、「近代画説８」（明治学会誌）に論文を発表、「若手作家による青函交流美術展」を企画・運営。1999年に第１回美術館連絡協議会図録奨励賞を受賞。著書に『山下りん明治を生きたイコン画家』（北海道新聞社刊）。『photographers' gallery press no.8　田本研造』に「田本研造－その生涯と業績」を執筆。

今回は、この夏開催されるアート・イベント、『アートフェス　ハコトリ』実行委員会代表の大下さんに、イベントの内容や楽しみ方、さらにアートを通して見た函館の魅力などについてお聞きしました。

丸藤：いよいよ、『アートフェス　ハコトリ』が始まりますね。

大下：開港１５０周年の今年、アートのジャンルで何かできないかという話が出ました。同じ開港の街横浜では『横浜トリエンナーレ』という国際的なイベントがあるので、函館でもトリエンナーレ（※１）をしちゃおう！と言っても、時間も予算もお金も無い。でも、どれくらいできるか“とりあえず”やってみよう！というのが、今回のイベントです。

丸藤：楽しそうなノリで始めたんですね（笑）

大下：８月のメイン展覧会は一か所だけでなく、西部地区や大門、朝市などで一斉にやります。お店のショウウインドウやカフェなどにも作品を飾らせてもらいます。廃屋を我々の手で奇麗にして会場にしちゃうところもあります。その一連の活動自体がアートであると考えています。まち全体でアートイベントをやることで、まち自体が綺麗になり甦り次につながっていきます。

丸藤：アートが、美術館を飛び出してまちに出ました。

大下：函館というまちと一緒にアートイベントをやりたかったんです。

丸藤：まちにこだわっていくことが大切なんですね。

大下：今、函館で活躍しているかた、函館出身で外に出たり今も住み続けたりしながら活躍している作家さんに注目してもらいたいです。特に、地元の人には函館にいたってこんなにアートができるんだということを知ってもらいたいし、観光客などには函館ってこんなに勢いがあるまちなんだと見てもらいたいです。

丸藤：函館には、美術関係のアーティストは、たくさん居るのですか？

大下：クラシカルなまちというイメージがあるかもしれませんが、ベテランの方から、中堅、若手と本当に多くのかたが様々な分野で活躍しています。身近にアーティストがいるまちなんですよ。

丸藤：美術は分かりにくいと言う人もいます。作品を鑑賞する時の“コツ”があれば教えてください。

大下：まずは、作家さんが「なぜこの作品を創ったのだろうか」を考えたり、「何を表現したかったのだろう？」「どうしてこういう表現をしたんだろう？」ということを考えながら観てみると、意外に違った目で観ることができます。好きになっていく程、鑑賞の“作法”みたいなのが必要になるのですが、それは自然に身に付きます。大切なのは、まずは作品を観て「格好いいなぁ」とか「素敵だなぁ」とか思うことです。

丸藤：そういう意味では、まち並みに作品が置かれるというのは、第一歩目として最適ですね。

大下：大門商店街でも何軒かのお店を貸していただいています。普通に商店街を見て歩くような気持ちでアートにふれると、何の構えもいりません。散歩がてら、コーヒーを飲みながら、まちを探索しがてらアートを楽しんで欲しいですね。

丸藤：函館のまちについて感じていることは？

大下：生まれたまちなので、まず元気になって欲しいという気持ちが強いです。それから、住んでいる人がもっとまちに対して自信を持ってもらいたいです。函館の人は、謙遜しつつも皆、函館のことが好きですよね。自信をもって、もっと好きだということを全面に押していくことで良くなっていくと思います。

丸藤：日本の近代美術が専門とうかがっています。

大下：はい。特に、明治時代の美術が専門です。大きく国が変わっていく中で、美術家達がどういう思いで作品を創っていたのかに興味があります。その時代は、作品を創ることは単なる自己表現ではなく、新しくなった国家や国を支える人達のために何かできると信じて創作していました。山下りんもそうですが、自分はどう生きるかともがきながら描き、描くことで自分の生きる道を模索し、描かれた作品を通して多くの人々が祈り癒される。そういう閉じていないアートがありました。

丸藤：ちょうど開港した頃のことですね。その当時、美術をやっていた人がどう感じ何を考えていたのかということを、１５０年後ハコトリが始まったことで見つめ直したり、未来の１５０年を感じたりすることは大切ですね。

大下：実は、私が勤めている北海道立函館美術館で行う展覧会では、開港１５０年と幕末から現在までという過去のことをやります。同時にハコトリでは未来のことをやっていることになります。開港当時の函館は、横山松三郎という明治時代に油彩画と写真の第一人者になるような最先端のアーティストを生んでいます。そう考えると、これからも函館から発信していけるものがあればいいなと思いますね。

丸藤：“とりあえず”からスタートしていますが、実はもの凄く大きな意味と可能性を含んでいるんですね。

大下：ハコトリはまだ土台を造るまえのような段階かもしれません。でも、とにかく色んなことを考え動いている連中がいるんだということを知ってもらい、自分たちも何かに参加してみようという切っ掛け作りになればいいかなと思います。

※１　トリエンナーレ・・・３年に１度開催する継続的な展覧会。

＜聞き手＞
函館市地域交流まちづくりセンター
センター長
丸藤競